

思はずも深山のおくに住居して
御物平盛に出づ。女院の
御歌なり。但し初句は思ひな
る。斯かる山里に明し居るは
思ひもかけざりし意。

六道 冥途に六つの世界ありて
一。天道。二。修羅。三。阿修羅。四。畜生。五。餓鬼。六。地獄。
觀身岸頼頼。船。身江頭不
レ緊。船。期。草。や。船。命。定
めなき。浮。草。や。船。命。定
たるなり。まづ一界を出た
天上の樂しみ。まづ一界を出た
す。是は身に知らずなり。
玉。の。長。き。を。か。ら。へ。に。云。ひ。
五衰。羽衣に云へり。
思ふ心地。舟を覆すか
思ふ心地。

叫喚の 叫喚地獄とて。諸罪人
の苦しみを受け叫ぶ世界と云
ふ。又一世界。合戦闘争と事する世
修羅道。又一つ。畜生。又一つ。苦
畜生道。又一つ。自身。畜生。なりて苦
しみを受くる世界。又一つ。苦
人道。又一つ。つひに。苦しみと爲
つて身に來るの意。

さへられ 妨げられて渡渉する
能はざりしと云ふ。

めの子 朝長に云へり。

シテ「思はずも深山の奥に住居して。雲井の月をよそに見んとは。
かやうに思ひ出でしに。此山里までの御幸。かへすぐもあり
がたうこころ候へ。」

法皇「近頃ある人の申せしは。女院は六道の有様まさり御覽じけ
るとかや。佛菩薩の位ならでは見給ふ事なきに不審にこころ候へ。
シテ「勅詔はさる御事なれども。つらく我身を案じ見るに。」

「夫身を觀ずれば。岸の額に根を離れたる草。命を論ずれば。江
のほとりにつながざる舟。レテサシ「されば天上の樂しみも。身に
白露の玉かづら。地「なごらへはてぬ年月も。終に五衰のれどろ
への。シテ「消えもやられぬ命の中に。地「六道のちまたに迷ひ
なり。シテ「まづ一門西海の波に浮き沈み。よるべも知らぬ船の
内。海にのづめども。潮なれば飲水せず。餓鬼道の如くなり。又
ある時は汀の波の荒磯に。うちかへすかの心地して。船こづり

つく泣きさげぶ。聲は叫喚の。罪人もかくや淺まや。シテ「陸の
あらうひある時は。地「是が誠に目の前の。修羅道のたぐかひ。
あられうろや數々の。駒の蹄の音きけば。畜生道の有様を。
見聞くも同じ人道の。苦しみとなりはつる。憂き身のはてが悲
しき。

法皇詞「げにありがたき事どもかな。先帝の御最期の有様。なに
どかわたり候ひつる御物語り候へ。シテ「其時の有様申すにつけ
て恨めしや。長門の國早柄とやらんにて。筑紫一先落ちゆく
べきと一門申しあひに。緒方の三郎が心かはりせしほどに。
薩摩瀉へやれとさんと申し折節。上り汐にさへられ。今のか
うよと見えしに。能登の守教經を。安藝の太郎兄弟を左右の脇
にはさみ。最期の供せよとて海中に飛んで入る。新中納言知盛
は。沖なる船の碇を引きあげ。兎とやらんにいたゞき。乳母子

大原御幸 百七十七 傳文道藏版

たきくもの浦より先西國に... 西國の傍に住居する武藏坊辨慶... 頼朝の御代官として平家を亡ぼし給ひ... 御兄弟の御中日月の如く御座候ふべきを... 御中九がはれ候ふ事かへすぐも口惜き次第にて候ふ... 然れども我君親兄の禮を重んじ給ひ... 一まづ都を御開きあつて... 西國の方へ御下向あり... 御身にあやまりなき通りを御歎き有るべき爲に... 今日夜をこめ淀より御船召され... 津の國尼が崎大物の浦へと急ぎ候ふ... 頃には文治の初めつかた... 頼朝義經不會の由... すては落居り力なく... 判官都を遠近の道狭くならぬ其さきよ... 西國の方へと心ざし... かつた... また夜深くも雲井の月... いづるも惜き都の名残... ひとしせ平家追討の都出よは引きかへて... 唯十餘人すこくと... さもうとからぬ友舟の... 上り下るや雲水の... 身は定めなき習ひかな... 世の中の...

候ふ者は。西塔の傍に住居する武藏坊辨慶にて候ふ。扱も我君判官殿は。頼朝の御代官として平家を亡ぼし給ひ。御兄弟の御中日月の如く御座候ふべきを。ゆひかひなき者の讒言により。御中九がはれ候ふ事かへすぐも口惜き次第にて候ふ。然れども我君親兄の禮を重んじ給ひ。一まづ都を御開きあつて。西國の方へ御下向あり。御身にあやまりなき通りを御歎き有るべき爲に。今日夜をこめ淀より御船召され。津の國尼が崎大物の浦へと急ぎ候ふ。頃は文治の初めつかた。頼朝義經不會の由。すては落居り力なく。判官都を遠近の道狭くならぬ其さきよ。西國の方へと心ざし。かつた。また夜深くも雲井の月。いづるも惜き都の名残。ひとしせ平家追討の都出よは引きかへて。唯十餘人すこくと。さもうとからぬ友舟の。上り下るや雲水の。身は定めなき習ひかな。世の中の...

淀川に流ひた... 山城の地名... 此末のくも... 月の出づる... 平家追討... 友舟の... 上り下るの... 雲水の... 行方定... 日本風... 淀川を下れば左... 雲水の... 行方定... 日本風... 淀川を下れば左... 雲水の... 行方定... 日本風... 淀川を下れば左...

人は何とも石清水。すみ濁るをば神ぞしるらんと。高き御影をふ一拜み。行けば程なく旅心。潮も波も共引く。大物の浦に着きよけり。ワキ詞「御急ぎ候ふ程よ。是ははや大物の浦に御着きよて候ふ。某がんとこの者の候ふ間。御宿の事を申し付けうするにて候ふ。如何に此屋のあるこの渡り候ふか。狂言「誰にて御入り候ふぞ。ワキ「いや武藏にて候ふ。狂言「さて只今は何の爲の御いで候ふぞ。ワキ「さん候ふ我君を是まで御供申して候ふ。御宿を申し候へ。ワキ「さらば奥の間へ御通り候へ。御用心の事は御心安く思へぬされ候へ。ワキ「如何に申し上げ候ふ。恐れ多き申し事にて候へども。正しく静は御供と見え申して候ふ。今の折節何とやらん似合はぬ様よ御座候へば。あつばれ是より御かへりあれか」と存じ候ふ。

判官「ともかくも辨慶はからひ候へ。ワキ」長つて候ふ。さらば靜の御宿へ参りて申候ふべし。

ワキ詞「いかゞ此屋の内は靜の渡り候ふか。君よりの御使に武藏が参じて候ふ。シテ詞「武藏殿とはあら思ひよらずや。何のため何使にて候ふ。ワキ」さん候ふ只今参る事餘の儀にあらす。

我君の御説は。是までの御参りかへすぐも神妙は思ひめ候ふ去りながら。唯今は何とやらん似合はぬやうに御座候へば。是より都へ御歸りあれとの御事にて候ふ。シテ「是の思ひもよらぬ仰せかな。いつくまでも御供とこそ思ひし。頼みても頼みなき人の心なり。あら何ともなや候ふ。ワキ」さて御返事をば

何と申候ふべき。シテ「みづから御供申し。君の御大事になり候は。留まり候ふべし。ワキ」あら事や候ふ。たゞ御とまり有るが肝要にて候ふ。シテ「よくく物を案する。是は武藏殿

神妙 感心の意。

何ともなや候ふ 何とせんかの意。

の御はからひと思ひ候ふ程。わらは参り直し御返事を申候ふべし。ワキ「夫はともかくもよて候ふ。さらば御参り候へ。

ワキ詞「如何に申上げ候ふ。靜の御参りにて候ふ。判官「いかに靜。此度思はずも落人となり落ち下る所に。是まではるく來りたる心さ。かへすぐも神妙なりさりながら。はるくの波濤をよのさ下らん事かへからず。先此度は都のほり。時節を待ち候へ。シテ「扱は誠は我君の御説にて候ふがや。よ

なき武藏殿を恨み申しつる事のはづか。返すぐも面目なうこう候へ。ワキ「いやく是はくるからず候ふ。唯人口を思ひめすなり。御心變はるとなればしめしめと。涙を流し申

けり。シテ「いやとよかくに數ならぬ。身には恨みもなければ。是は舟路の門出なる。地「浪風も。靜を留め給ふかと。涙を流しゆふでの。神かけて變はらじと。ちざり事も定めなや。

人口と思しめすなり 世間の惡評と恐れ給ふの意。

浪風も靜と 波風の靜なるべきと祈る云ふより靜の名に掛けたり。ゆふして 木綿四手を巻く。神の

文字を呼び出だす爲の詞。
別れよりまさりて惜しき命かな。
二度あはれんと思へば。千載集
の歌。別れも惜しけれ命さへ
有らば二度君に逢はるべし
命の力が一層惜しまるるべし
の意。

一さし 一曲に同じ。
時の調子 樂には四時の時節に
よりて定まりたる調子あり。春
ならば雙調。秋ならば平調と云
ふ類なり。
取りあへず 調子を取ると即坐
波口郵船風出。波頭所日晴着
期。郵船の詩。波口は波頭の渡
は海上に同じ。所は左邊せら
れて行きたる所。
身は物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ
源氏物語の歌。此調を取る。
陶朱公。もろし春秋戦國の頃。
越の國の忠臣たりし范蠡と云ふ
人の事。
勾踐の社と 會稽山にて君臣共

げよや別れより。まさりて惜しき命かな。君よ二たび逢はんと
ぞ思ふ行末。
判官「如何に辨慶。静よ酒をすよめ候へ。ワキ「畏つて候ふ。げよ
げに是は御門出の。行末千代ぞと菊の盃。静にこそはすよめけ
れ。シテ「妾は君の御別れ。やる方なさにかきくれて。涙にむせ
ぶばかりなり。ワキ「いや〜これは苦〜からぬ。旅の舟路の門
出の和歌。唯一さ〜とす勸むれば。シテ「其時静は立ち上り。時
の調子を取りあへず。波口の郵船は。風静まつて出づ。地「波頭
の謫所は。日晴れて見ゆ。ワキ「是に烏帽子の候ふめされ候へ。
シテ「立ち舞ふべくもあらぬ身の。地「袖うちふるも耻か〜や。
シテサシ「傳へ聞く陶朱公は勾踐をともし。地「會稽山に籠りか
て。種々の智略をめぐら〜。終に吳王を亡ぼ〜て。勾踐の本意
を達すとかや。ワキ「〜かるに勾踐は。二度代をとり會稽の耻

に受けたる暈辱を脱ぎしと云く
陶朱公の功なりしと云ふ。

五湖の遠島と 事平らぎて後。
范蠡は舟に乗り五湖に浮びて湖
に隠らざりしと云ふ。五湖は湖
水の名。
月の都 月の世界に在る都と云
ふ。木にて。たゞ京都の美稱に
も常に用ふ。

つひにはなびく 頼朝の編歴も
解けて心の奥き従ふと云ふ。な
び枝の文字を讀ひ出たす。青柳よ
枝を連ぬる 連枝とて兄弟の事
と云ふ。
朽ちし果つべき 朽ち果てばせ
た頼め 田村に云へり。
やがて御世に 直に義經の橋を
得る世に由づべしと云ふと出舟
にかけたり。

烏帽子直垂 舞ふ爲に着用せし
裝束。

を雪さ〜も。陶朱功を成すとかや。されば越の臣下にて。政を
身に任せ。功名富み貴く心の如くなるべきを。功成り名とけて
身〜りぞくは。天の道と心得て。小船に棹さ〜て五湖の遠島を
たの〜む。シテ「かゝる例も有明の。地「月の都をふりすて〜。西
海の波濤にれもむき。御身の科のなきよ〜を。歎き給は〜頼朝
も。終よはなびく青柳の。枝を連ぬる御ちざり。などかは朽ち
〜はつべき。地「唯たのめ。シテ「唯頼め。〜めぢが原のさ〜も
ぐさ。地「我世の中よあらん限りは。シテ「かく尊詠の偽りなくは。
地「かく尊詠のいつはりなくは。やがて御代よ出舟の。歌「船子ども。
はやともづなを疾く〜と。すくめ申せば判官も。旅の宿りを
いで給へば。シテ「静はなく〜。地「さほ〜直垂ぬ〜捨て〜。涙
にむせぶ御別れ。見る目もあはれなりけり。
ワキ「静の心中察〜申〜て候ふ。やがて御舟をいたさうするにて

あら笑止や 仲光に云へり。今
武庫山 孫 武庫山にあり。今
弓弦羽 同 武庫山にあり。
武庫山 同 武庫山にあり。
武庫山 同 武庫山にあり。
武庫山 同 武庫山にあり。
武庫山 同 武庫山にあり。
武庫山 同 武庫山にあり。

忽然とあらはる。船中の習
ひにて見ゆふりとする事なりと
云へり。これとあやかしと云ふ。

神明佛陀の冥感に背き。神慮に
主上 安徳天皇を指す。
月卿雲霞の如く。月卿雲霞と云
ふ。雲霞にかけたり。月卿は三
位以上の人。雲霞は雲の上人の
意にて昇殿と免されし人と云
ふ。

思ひもよらぬ 浦波の縁。

巴浪の紋 巴浪の形と書かけ
る物なれば巴浪と云ふ。長刀と
くるくると振り廻す形。

候ふ。ツレ「いかし申し候ふ。ワキ「何事にて候ふぞ。ツレ「君よりの御説よは。今日は浪風あらく候ふ程に。御逗留と仰せいだされて候ふ。ワキ「何と御逗留と候ふや。ツレ「さん候ふ。ワキ「是は推量申すよ。静よ名残を御惜みあつて。御逗留と存じ候ふ。先御思案有つて御覽候へ。今此御身よてかやうの事は。御運も盡きたると存じ候ふ。其上とせ渡邊福島をいでし時は。以ての外の大風なりし。君御舟をいだし。平家を亡ぼし給ひし事。今以て同じ事ぞか。急ぎ御舟をいだすべし。ツレ「げよく是は理なり。いづくも敵と夕浪の。ワキ「立ち騒ぎつゝ舟子ども。地「えいやくと夕浪。つれて舟をぎいだしける。ワキ「あら笑止や風が變はつて候ふ。あの武庫山れる弓弦羽が嶽より吹きれる嵐。此御舟の陸地よ着くべき様もなし。皆々心中よ御祈念候へ。ツレ「いかし武蔵殿。此御舟よはあやか

しが付いて候ふ。ワキ「あし暫く。さやうの事をば船中よて申さぬ事にて候ふ。あらふしとや海上をみれば。西國よて亡びし平家の一門。れのく浮み出でたるぞや。かゝる時節を伺ひて。恨みをなすも理なり。判官「いかに辨慶。ワキ「御前よ候ふ。判官「今更れどろくべからず。たどひ惡靈恨みをなすとも。うも何事の有るべきぞ。惡逆無道の其積り。神明佛陀の冥感よ背き。天命よ沈みし平氏の一類。主上を始め奉り。一門の月卿雲霞の如く。浪よ浮びて見えたるぞや。後シテ「抑是は。桓武天皇九代の後胤。平の知盛幽霊なり。詞「あらめづらしやいかし義經。思ひもよらぬ浦浪の。地「聲をうるべに出舟の。シテ「知盛が沈みし其あり様よ。地「又義經をも海よづめんと。夕浪に浮べる長刀執り直し。巴浪の紋あたりを拂ひ。潮を蹴立て惡風を吹きかけ。眼もくらみ心もみだれて。前後を

打物 刀の事。現世の人。幽霊ならぬ人。

東方降三世云々。悪魔を降伏する時に祈る詞。かならず此五大明王に祈るなり。道成寺にも既に出でたり。次々にも多し。

衆にかけて。道成寺に出づ。不動明王の持ち給ふ繩の事。

跡しら波。行方も知らず波と共に消し失せたり。意。

前シテ 童子
後シテ 龍神
名所古事と借りて君が代と祝ふ心と作れり。されば祝言能とて初春の能には終に之とするを故實す。都より住吉へ行く道の地名に於て。關所の月も鎮守の用なき治世とのふ。關戸の宿は

振津にあり。當今 當代の主上。吹く風云々。太平のまこと云々。濱の市云々。濱に市を開く事。高麗云々。三韓の一つ。今の朝鮮の地。たれしもあり。日出度き世の例。今日に在りの意。秋津洲。日本全国の異名と爲れり。御調の道の年々朝廷に奉る貢物を運び来る津路の末は皆この津守の浦。住吉の浦の名。

のどかに立つや。風の立つと市の立つとを繋ぐ。遠里小野。住吉の内の地名。遠里云々。君恩に洩れぬに於て。都より十里の外にあり。住吉は京所も住吉の。住み好き意に於て。瑞籬の。久しきの統嗣。御幸と深きに於て深きまつけたり。意。は豊年の光と云へばこれらも風の意。いづくも同じ。日影の至らぬ方なきと日の本に云ひおく。

忘るばかりなり。判官「その時義經少むもさわがず。地「うの時義經少もさわがず。打物抜き持ちうつゝの人に向ふが如く。言葉をかはし戦ひ給へば。辨慶れへだて。打物わざよてかなふまじと。數珠さらりと押もんで。東方降三世。南方軍荼利夜刀。西方大威徳。北方金剛夜刀明王。中央大聖不動明王の索にかけて。祈りのられ惡魔次第遠ざかれば。辨慶舟子よ力を合はせ。御船を漕ぎのけ汀よすれば。猶怨靈は慕ひ來るを。追つばらひ祈りのけ。又引く汐よゆられ流れ。またひく汐にゆられながれて。跡白波とぞなりよける。

岩船

いはふね

作者未詳

ワキ次第「げよ治まれる四方の國。關の戸さよて通はん。詞「うもろも是は當今よ仕へ奉る臣下なり。扱も我君賢王よましますよ

より。吹く風枝をならさず民とさよをさよす。誠にめでたき御代よて候ふ。さる間攝州住吉の浦よ始めて濱の市を立て。高麗唐土の寶を買ひとるべとの宣旨に任せ。只今津の國住吉の浦に下向仕り候ふ。道行「何事も心よかなふ此時の。ためもありや日の本の。國ゆたかなる秋津洲の。波も音なき四つの海。高麗唐土も残りなき。御調の道の末こよ。津守の浦よ着きよけり。

シテッレ一聲「松風ものどかよたつや住吉の。市のちまたよ出づるなり。ツレ「遠里小野の草葉まで。二人「君のめぐみよも洩れじ。シテサシ「夫れ圓滿十里の外なれども。こよは所も住吉の。二人「神と君とは隔てなき。誓ひ古き瑞籬の。久き世々の例とて。こよは御幸をふかみどり。松よたぐへて千代までも。たよき君の御旅居。いづくも同じ日の本の。もれぬ御影ぞありがたき。

伊勢島や 海人の名所なれば云ふ。住吉の地には非ず。

たましくも 玉は貝の中より出づるものなれば沙干に拾ふことひてたまさかなる意にわづらひ玉の玉 龍女が寶珠と云ふさかづ玉の玉 龍女が寶珠と云ふさかづ玉の玉 龍女が寶珠と云ふさかづ玉の玉

銀盤 銀にて作れる盆。

私に持ちたる 公の寶物では無ければともの意。私用品の意。龍女が寶珠 八才の龍女が寶珠に寶珠と捧げたる古事。

合前の玉 これも有名の玉なり。下に出づる 合前の註に古事と云ふべし。

歌「いざ〜市は出で汝の。月れも〜ろき松の風。伊勢島や。汝千はひろふたま〜も。待ちえよけりな此御代に。鸚鵡の玉かづら。斯かる時〜も生れ来て。民ゆたかなる樂〜みを。何よたど〜ん秋津洲や。高麗唐土も〜だてなき。寶の市は出でうよ。ワキ詞「ふ〜さやな市人あまた多き中よ。是なる者を能く〜見れば。姿は唐人なるが聲は大和詞なり。又銀盤に玉をすゑて持ちたり。うも御身はいかなる人ぞ。シテ詞「さん候ふか〜る御代ぞと仰ぎ参りたり。又是なる玉は私〜持ちたる寶なれども。あまりよめでたき御代なれば。龍女が寶珠とも思ひ召され候〜。是は君〜捧物よて候ふ。ワキ「ありがた〜。それ治まれる御代のある〜は。賢人も山よりいで。聖人も君よつかふとい〜り。然れば御身は誰なれば。か〜る寶を捧ぐるやらん。委〜く奏聞申すべ〜。シテ「あらむつか〜と問ひ給ふや。もろこ〜合前

如意寶珠 多く龍の腹中にある珠にて一名摩尼珠と云ふ。佛書に見ゆ。此珠を得る者は毒も害する能はず。火も燒く能はず。るなどの功德によりて名づけたり。

百濟 これも三條の〜。四の海青木の原の 高砂に云へ

行合のまのあたり 新古今集に「夜〜衣〜滑〜」と云ふ。行合の間より 滑〜と云ふ。行合の間より 滑〜と云ふ。行合の間より 滑〜と云ふ。行合の間より 滑〜と云ふ。

春の夜の一時の 春宵一刻値千金の詩と引く。田村に云へり。春の夜の一時は千金と云ふ。値ありなく。住吉の松風には値の定めなく。いよく尊しとの意。千顆萬顆 願は玉と〜二つと云ふ。千顆萬顆 願は玉と〜二つと云ふ。千顆萬顆 願は玉と〜二つと云ふ。

の玉とても。寶珠の外は其名はなし。是も津守の浦の玉。心の如〜と思〜めせ。ワキ「心の如〜と聞ゆるは。扱は名にれふ如意寶珠を。我君よさ〜げ奉るか。シテ「夫れ賢王の御代の〜る〜は。天も納受〜地もうるほひ。か〜る寶も出現すべ〜。ワキ「げよ〜今の御代の有様。治めぬ國もれのづから。靡き〜たがふ四方の國。シテ「運ぶ寶や高麗百濟。ワキ「唐土船も西の海。シテ「青木が原の波間より。ワキ「あらはれ出で〜住吉の。シテ「神もまもりの。ワキ「道すぐ〜。地「こ〜御幸を住吉の。神と君とは行合の。目のあたりあらたなる。君の光り〜めてたき。ワキ「千代までと。菊賣る市の數々に。四方の門邊〜人さわぐ。住吉の濱の市。寶の數を賣るとかや。シテ「春の夜の一時の。千金をなす〜とて。たど〜はあらむ住吉の。松風價な〜。金銀珠玉いかばかり。地「千顆萬顆の玉衣の。浦が津守の宮柱。シテ「た

明治廿五年一月十四日印刷
明治廿五年一月廿五日出版

定價金二拾五錢



版權所有
曲通解

編輯者

大和田建樹

印刷者兼

大橋新太郎

發兌元

博文館

東京日本橋區本石町三丁目十六番地

第一高等中學校教授落合直文。小中村義象兩君合著
 ●**新撰** **日本文典** 實價金六拾 郵便稅拾
 第一高等中學校教授落合直文先生著
 ●**新撰** **歌典** 實價金拾二 郵便稅拾
 從二位伯耆東久世通隆撰
 佐々木弘綱。岡野伊平兩大人撰
 ●**假名通字** 實價金八 郵便稅八
 小中村義象。落合直文。萩野由之三君校閱
 大宮宗司。星野三郎。田島保弘三君合著
 ●**國文辭典** 全三冊 正價一冊廿五 郵便稅一冊六
 埃國特命全權公使渡邊洪基君校閱
 金國同僑侯子爵。藤羽美壽君校閱
 田中浪子君編
 ●**假名交文典** 實價金八 郵便稅二
 大宮宗司星野三郎兩君合著
 ●**日本小文典** 實價金拾五 郵便稅四
 第一高等中學校教授久米幹文先生校閱
 于菜縣島與讀究分所講師帆足正久君著
 ●**假字つかひ早學** 實價金拾五 郵便稅二
 第一高等中學校教授久米幹文先生校閱小谷一馬君著
 ●**國語教授問答** 實價金拾五 郵便稅二
 佐々木信綱君著
 ●**歌の葉** 實價金拾五 郵便稅二
 內務大臣品川彌二郎公校閱
 正四位秋月權繼君評。從六位天野御民君編
 ●**歷史百首** 實價金拾二 郵便稅拾

栗木神君三條實高公。正一位三條實美公御序
 兼院議員良美。眞直君校。佐々木弘綱大人撰
 ●**足代弘訓翁家集** 實價金三拾 郵便稅六
 石川彌齋先生著
 ●**文法詳解** 實價金二拾 郵便稅六
 博學侍所教子君序文。佐々木信綱君著
 ●**日本婦女用文** 實價金二拾五 郵便稅四
 博學侍所教子。竹屋雅子兩君撰。佐々木信綱君著
 ●**婦女詞藻** 第一編 實價金拾二 郵便稅四
 從二位東久世伯耆。從一位近衛公府兩公校閱
 從三位木田男爵序文。佐々木弘綱大人撰
 ●**日本文範** 全二冊 實價金四拾 郵便稅五
 夜露庵金羅宗匠撰
 ●**明治俳諧一萬集** 實價金二拾五 郵便稅二
 從二位東久世伯耆。從一位近衛公府兩公校閱
 高時御歌所長撰。佐々木弘綱大人撰
 ●**千代田歌集** 全二冊 實價金四拾 郵便稅五
 實軒岸上操君編
 ●**古今狂歌狂句集** 實價金二拾五 郵便稅二
 大和田建樹先生撰註校訂
 ●**古今狂歌狂句集** 全六冊 實價金一拾五 郵便稅四
 內田不知庵先生著
 ●**文學班** 實價金三拾 郵便稅四
 文學博士島田實禮君序文。淺江保壽君述
 ●**國民學** 實價金一拾二 郵便稅拾

- 岡本實石。小野蘭山。巖谷一六。日下部晴鶴。諸大先生
神波即山。栗本純庵。岡鹿門。長森。學稼。校大先生
石川瀧野先生。大觀如電。
- 訂註。日本大玉篇。全三冊。正價金三
郵便稅廿四錢
- 因芳。日本女禮式。尾形月耕著。正價金五
郵便稅拾二錢
- 飯島牛十郎著。經濟書。實價金二拾五
郵便稅二錢五厘
- 公府毛利元德公題詠。大敷正本居題詠。正價金七拾二
佐々木弘綱。佐々木信綱。若校校註。集。全三冊。正價金七拾八
郵便稅拾八錢
- 從二位男爵元田永字公序文。源氏物語。全五冊。正價一圓卅五
小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校一標註。郵便稅拾五錢
- 伯辭東久世公題辭。本唐豐顯先生題詠。飯田武勝。先序。正價金七拾二
小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校訂標註。郵便稅九錢
- 從一位侯爵久我建通公題辭。內藤証聖先生序文。太
小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校訂標註。正價金七拾二
郵便稅九錢
- 小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校訂。保
平。治。物。語。正價金二拾五
郵便稅三錢
- 小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校訂。平
家。物。語。正價金二拾五
郵便稅三錢
- 小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校訂。古
今。著。聞。集。正價金二拾五
郵便稅三錢
- 小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校訂。公
事。調。根。源。正價金二拾五
郵便稅三錢
- 小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校訂。大
鏡。正價金二拾五
郵便稅三錢
- 小中村義象。落合直文。萩野由之三先生校訂。水
鏡。正價金二拾五
郵便稅三錢
- 巖谷一六先生題辭。錦山矢土勝之先生序文。日本名家詩選。正價金二拾五
郵便稅二錢五厘
- 岡本實石。朝鮮名士林林李氏題辭。松井廣吉著。和漢名家詩集。正價金二拾五
郵便稅二錢五厘
- 福密爾岡伯辭勝安房公。向山實村。福政。曲。園。自。述。詩。實價金二拾五
郵便稅二錢五厘
- 福田完之先生著。厚。生。利。用。集。正價金拾
郵便稅貳錢
- 素戔尊。古。今。狂。詩。大。全。正價金二拾五
郵便稅二錢五厘
- 如電居士大禮。新。選。歌。曲。集。全二冊。正價金四
郵便稅五錢

壹ヶ年完成女學全書發兌廣告

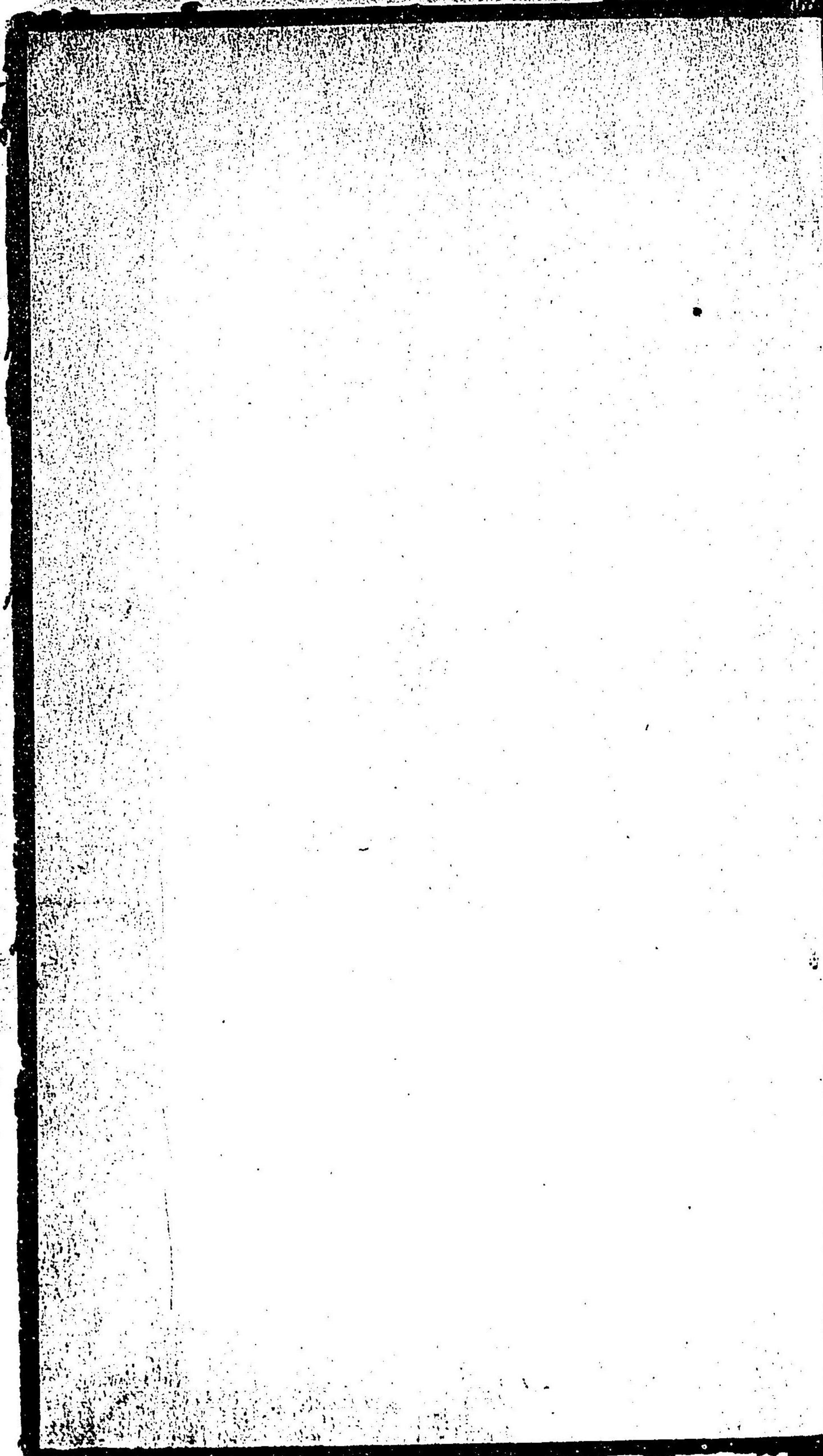
女學全書

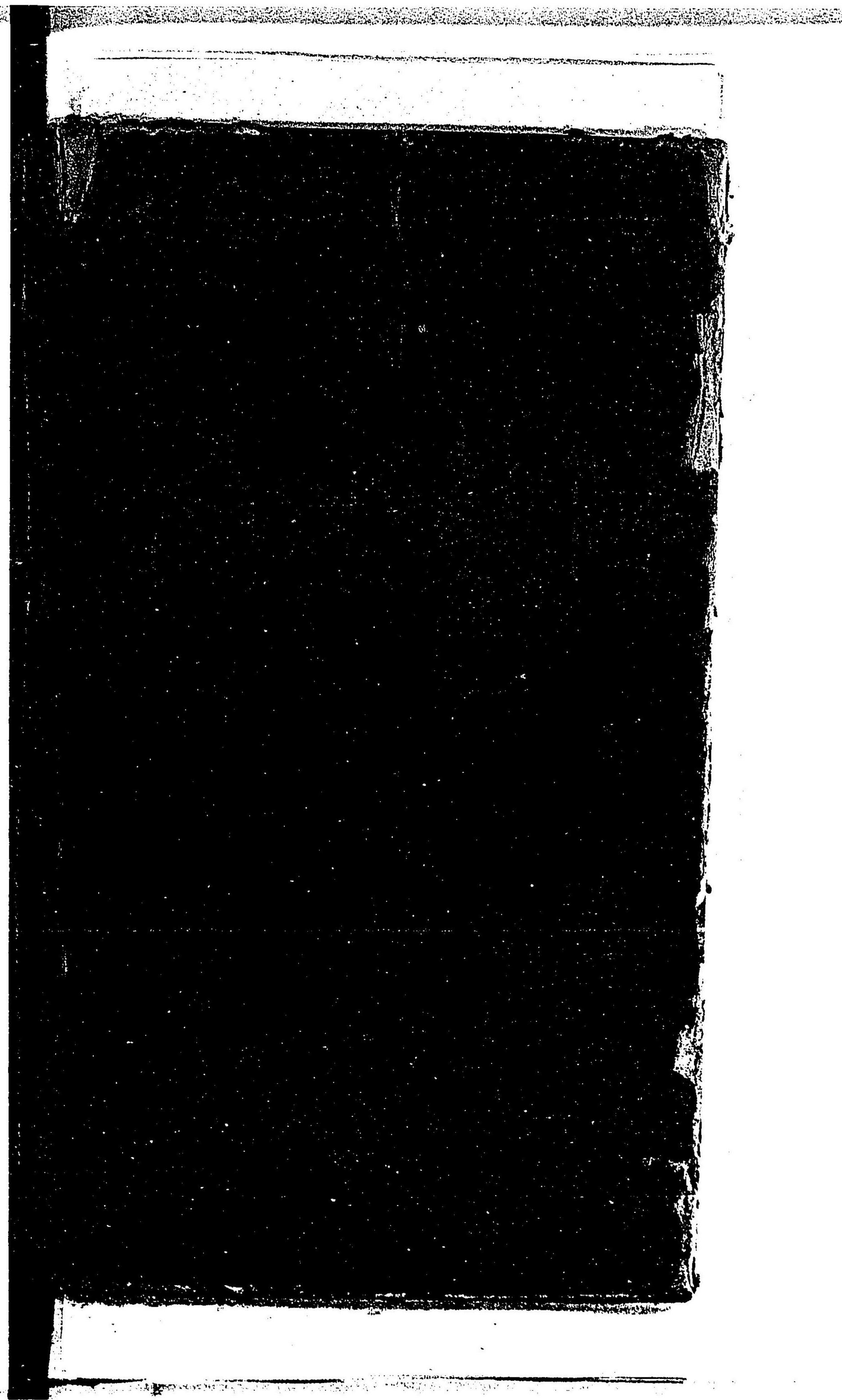
全部拾二卷 每編美本
紙 二千五百頁 一冊大判
正價 金拾五圓六冊前金八拾五圓全十二
册前金壹圓六拾錢郵稅一册二付四
錢 每月登册發兌一ヶ年間全部出版完
成スベシ

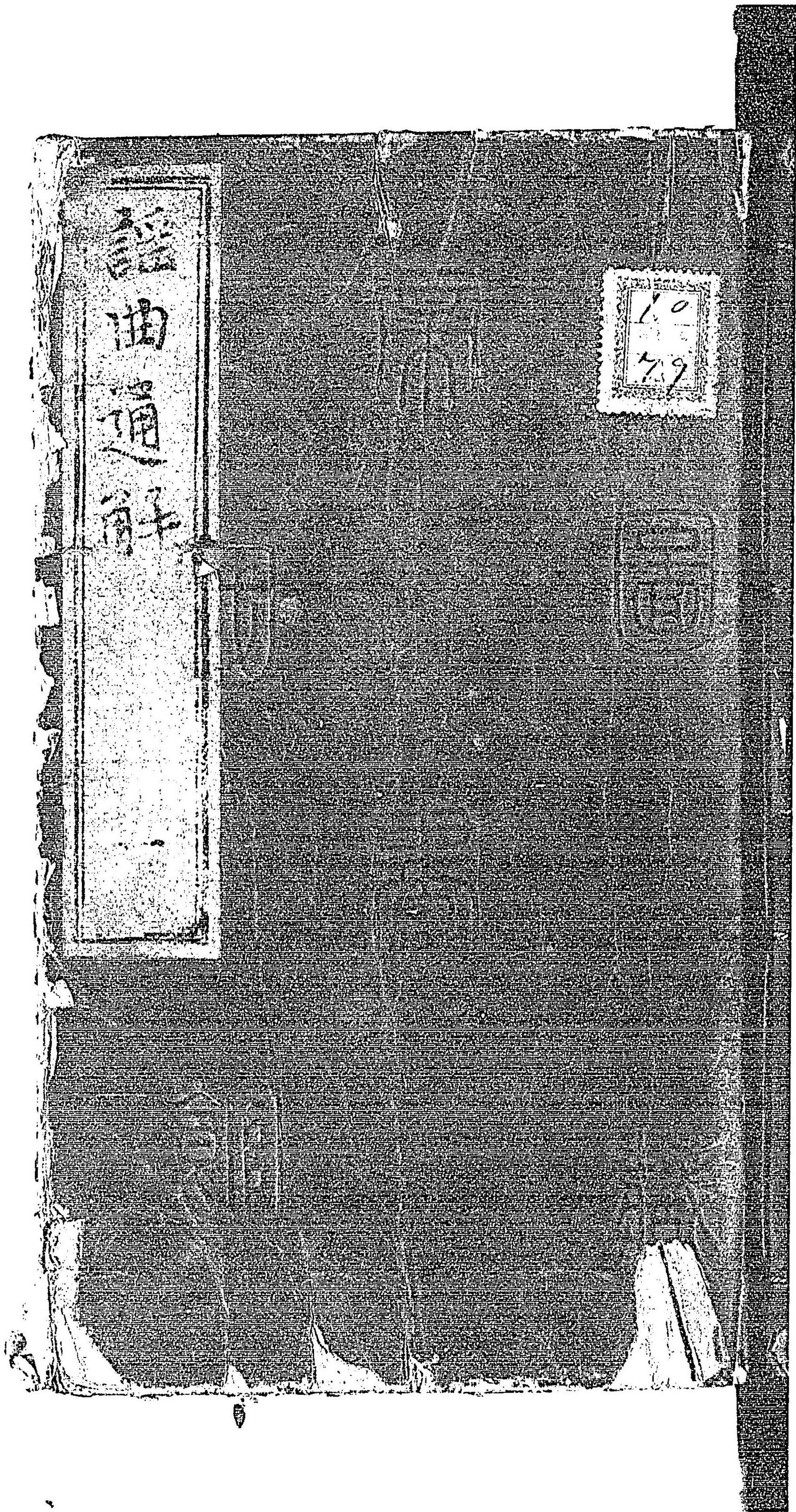
治國の要は一家を修むるを先とす、一家を修むるは婦人の任ならずや、大人を鞠育し、英俊を生成する亦
婦人に在り、婦人教育の必要なる辨を俟たず、依て今婦道女學等一切女性の心得べき事は、悉く之を網羅し、
本年一月より十二月まで、滿一ヶ年間を期して、此を書大成せんとす、其科目は左の如し

- 目科書本**
- 第壹編 日本小文典
 - 第貳編 百人一首略解
 - 第參編 習書法
 - 第肆編 室內粧飾法
 - 第伍編 家政法及簿記
 - 第陸編 裁縫毛糸縫物法
 - 第柒編 作文法及婦女用文
 - 第捌編 禮式並遊戯法
 - 第玖編 育兒法、看病法
 - 第拾編 衛生法、生理大意
 - 第拾一編 內外列女鑑
 - 第拾二編

10
49







088168-001-1

10-79

謡曲通解

大和田 建樹 / 編

1卷

M25

DBH-0039

